

「楽しむ心、 楽しませる心」と 「感謝の思い」を込めて

「青龍太鼓」 団長 青柳克彦さん

福岡市西区今津で青柳鉄工建設株式会社を経営する青柳さん（六十八歳）によつて、一九九六年に結成された青龍太鼓は、来年には十五周年を迎える九州でも一、二位を争う人気和太鼓グループだ。

「青龍太鼓道場」もつくった。
観客を楽しませる演出で人気

青柳さんは和太鼓を始めるにあたり、福岡市内の名門太鼓「当仁太鼓」の村山雅人さんに師事、半年間の修行の後、素人ばかり六人で結成した。しかし、今では各種イベントや福祉施設での公演依頼が年に約四十回と引つ張り蛸になつている。「九州に面白い太鼓がある」と遠くは京都からの公演依頼が来るほどだ。

日本専売公社に勤務する父親が海軍で音楽隊として、バイオリンとクラリネットを演奏していたことから、小さい頃から音楽に親しんでいた青柳さん。唐津出身で小学校時代には「唐津くんち」で山を引いて太鼓を叩いていた。「元々、和太鼓が好きで、自分の健康のため、心のために始めました。お客さんに喜んでもらえると、やっていて自分も楽しいです。人生で一番大事なのは楽しむことだと思います。仕事でもなんでも嫌々では

なく、自分が楽しむのが基本です。そうでなければ続きません」。

三十代から子供会や育成会などで、ソフトボール、ドッジボール、バレーボールなどの監督や審判をしていたが、四十代半ばで視力が低下したことから、すべてを退いた。しかし、何か打ち込むものが欲しくなつた。それが、和太鼓だつた。「和太鼓の魅力は世界中の他の太鼓と違いドォーンと響くところですよ。その風圧がお客さんにまで届き、お腹に響く。鳥肌が立

ってくる。まるで魂に響くようですよ。最初は太鼓を一、二台買つてやろうかと思つていたのが、エスカレートしてここまできました」。

青龍太鼓が所有する太鼓は十九台。一番大きなやぐら太鼓一台をはじめ、長胴太鼓六台、締太鼓七台、小太鼓五台はいずれもプロ仕様の石川県の浅野太鼓だ。「いい音を聞いてもらいたかったからです。音がずっと伸びて行きます。和太鼓の醍醐味です」。経営する工場の地下を改造して完全防音の

扮して客席を練り歩き、箱根八里を歌いながらチンドン屋の扮装でサービスすれば客席は大盛り上がりになる。老人福祉施設などではチンドン屋に涙を流して喜んでもらえる。「私たちの子供の頃にはチンドン屋がよく来て、お菓子を貰つたり、広告紙を貰つたりしていました。お年寄りの皆さんも童心を思い出すでしょう。お年寄りが涙を流して感動してくれて、子供達がキャッキヤと笑ってくれるのが一番嬉しいですね」。

現在、青龍太鼓のメンバーは西区、糸島の太鼓好きが集まった学生から社会人まで年齢も職業も様々な二十人。女性は子育てが終わり余裕のできた団員がほとんどで、男性は仕事を持つ社会人が多く、休日返上で練習に励んでいる。基本的にはボランティアで、公演に掛かる費用は交通費と運搬費のみだ。歌手のバックでの演奏もしており、その際の出演料で、福祉団体の福祉車両購入に役立てるなどの活動もしている。「出演料を払う様な余裕のあるところは少ないですからね。利益の為にやっている訳ではありませんから」。

一風変わったメンバーも居る。「ロボット竜ちゃん」だ。子供たちに「ものづくりの日本をアピールしたい」と青柳さんが半年以上をかけて、制作したアニメキャラクターの顔をした太鼓を叩くロボットで、子供たちを多に楽しませている。「私が機械屋やけん」。



「観客との一体感が青龍太鼓の魅力」と青柳さん

子供は誰かが入っていると思って、びつくりします。大人気です」。

音楽指導と作曲を手掛けるのが、元教師で現役時代にプラスバンドの指導をしていた石田昭士さん（七十四歳）。歌謡曲を和太鼓用にアレンジしたのも多く、和太鼓をより親しみやすいものにしていく。「太鼓だけではうるさいと思われられるかもしれないと感じた時に思い出したのが、三波春夫の『お客様は神様』という言葉です。チンドン屋、鬼、ひよつとこなどの歌や踊り、芝居などのパリエーションを加え、お客さんを巻き込んで楽しませるパフォーマンスにしました。結果、大成功でした」。

観客を楽しませることを第一にした型にはまらない観客との「打てば響く」の関係を体現した演出は、和太鼓の魅力をより一層大きなものにし、その公演での一体感は演奏する側、聞く側両方の喜びになっている。

感謝の気持ち

「私は経営が上手かったようです。貧乏で育ちましたから、お金の有難さを人一倍知っていて、無駄に使いませんでした」。

唐津商業高校校定時制を卒業後、

三菱電機株式会社に入社。二十六歳で退社し、起業。今年で独立して四十二年目になる青龍鉄工建設株式会社は順調だ。株にも手を出さず、ゴルフ会員権も持たない。酒も飲まず、好きなのはスポーツだけ。子供の頃からガキ大将で人と楽しくやるのが好きだった。十五歳で父を亡くした。四十歳で大黒柱を失った母親は内職をして、四人の子供を育てた。貧しかった。働きながら定時制高校に通った。母親の背中を見て育った。

「早くに父親を亡くしたことは不幸でしたが、長い人生の中で振り返ると辛抱することやお金を大事にすることができるようになりました。一番大変だったのは母親でしょうね。早く母親を助けなければと思っていました」。

長男だったことから兄弟の親代わりだった。弟達を結婚させ、全員が家を買うのを目標にし、皆が結婚、子供にお金が掛かる前の四十五歳までにローンが終わるよう家を買った。「自分の息子は孫のように感じて、育てるのは楽でした」。

青柳さんは中学、高校で年に五六回講演をしている。その時に「これだけはがんばろう」と子供達に

言うことがある。それは感謝をすること。「先祖、人、ものに感謝ができなければ、社会に出てもダメだと言います。何事にも感謝する気持ちを毎日持つていけば、暴力もない、いじめもない暮らしができると思います」。

青柳さんの太鼓には「楽しむ心、楽しませる心」と「感謝の思い」が詰まっている。「お客様は神様」が詰まっている。公演をきっかけに中学校や知的障害施設での和太鼓の指導も行っている。「何より体によく、礼儀を学ぶ機会にもなり、チームワークも覚えられます。太鼓は叩く方にも聞く方にも響く楽器です」と太鼓の種も蒔いている。

最近では、息子で専務の武彦さん（四十一歳）を中心とした若手が青龍太鼓の打ち方を引継ぎ張っていて、青柳さんは鬼やひよつとこ、チンドン屋をやる事が多くなってきたそうだ。

「決めたことはずっとやる。やるなら中途半端は好かん」と青龍太鼓を育ててきた青龍さん。毎日腕立て伏せを三十回しているという青柳さんの腕はとて六十八歳だとは思えない程に逞しい。元気の秘訣は「孫とゆつくり遊ぶ暇がないほど忙しい」ことだそうです。